

THE S.P ECO NEWS

☆☆秋号☆☆

「今日から貴方も ECOしちゃおう？」 今回のECO情報

ペットボトルのキャップが世界の子供を救う！！



「ゲリラ豪雨で日本列島は水没？」



今年8月、豊島区の下水道工事現場で、集中豪雨による増水で6人の作業員が流され、5人が亡くなられた事件は記憶に新しい悲惨なニュースでした。集中豪雨は、梅雨の時期から夏、更には台風シーズンの初秋までに発生しやすい大雨です。最近では、発生の予測が困難なこと、極めて限定的に集中して降ることで、ゲリラ豪雨とも呼ばれています。ゲリラ豪雨は、気象庁が定めた名称ではありませんが、一般的に1時間に50ミリ以上の大雨を言います。発生の主な原因は、前線や収束線の接近によって大気が不安定となり、発達した積乱雲が生じさせるものとされています。また、地表面が太陽熱により温まることで、上昇気流が発達して積乱雲を発生させて豪雨となる環境を作ることもあります。その他にも最近よく耳にするヒートアイランド現象もゲリラ豪雨をもたらす原因になります。

死者も出すほどの激しいゲリラ豪雨を予測することは可能なのでしょうか。現在では予測は相当困難なようです。通常の雨のように前線や低気圧により発生するものと異なり、ゲリラ豪雨は早いものでは数分から、遅くても数十分で驚異的に発達する積乱雲が原因ですので、事前に予測することは難しいとのことです。しかし、民間のサービスとして「ゲリラ豪雨メール」というものがあり、全国の情報提供者から局地的な積乱雲の状況を集めて送信するサービスが話題を呼んでいます。

万が一、ゲリラ豪雨に遭遇した場合はどうしたらよいのでしょうか。まずは冠水した道路を歩いたり、車で進入したりしないことです。また、地下で浸水にあった場合も、冷静に避難経路を確認し、階段を使って手摺に掴まり地上へ速やかに出ます。その際、エレベーターの使用は避けましょう。

ゲリラ豪雨の発生頻度は地球温暖化の影響もあって、増加の一途を辿っています。気象庁の発表では、降雨量が1時間に50ミリ以上の発生回数が、76年から87年では162回、88年から97年が177回、98年から07年では238回と確実に増えています。

このような数字を見ると、地球温暖化の影響は極めて身近なものと感じられます。そして、危険も同時に忍び寄っています。私達はこの現実をどのように考えたらよいのでしょうか・・・。

以前はゴミとして処分されていたペットボトルのキャップは、今では重要な資源として新たな製品に生まれ変わっています。そして隅田ピアザグループの私達もキャップを集めて、ボランティア団体に送っています。それが発展途上国の子供たちのワクチンになっていることはご存知でしょう。

今回の特集では、ペットボトルのキャップがどのような経路を辿り、ワクチンとして活躍しているか紹介します。

前述したように以前はゴミだったペットボトルのキャップ。その大半が焼却や埋め立て処分されていました。今では地球温暖化の原因となる二酸化炭素を排出する焼却は敬遠されていますが、ペットボトルに付いたままのキャップは、外すための手間とコストを嫌って処分されていました。しかし、現在ではマテリアルリサイクルとして建築資源となっています。

私達が集めたキャップは、「特定非営利活動法人グリーンバード」へ一旦送られ、更にエコキャップ運動を推進する「グループMATE(マテ)」に集められます。そしてリサイクルペニヤなどの建築資材を生産する企業に売却します。キャップの売却代金は、「世界の子どもにワクチンを日本委員会(JCV)」に寄付し、それが発展途上国の子供達のワクチンとなります。

ワクチンと一口にいても様々なものがありますが、発展途上国ではポリオ(小児麻痺)や麻疹、ジフテリアのワクチンがないため、一日に4000人の子供達が5歳の誕生日を迎えられずに死んでいるとのことです。この惨状を知り、今や貴重な資源となったペットボトルのキャップを使い、発展途上国の子供達を救おうという運動が全国レベルで広がって行きました。

皆さんから集められたペットボトルのキャップは、800個で20円になります。これは小児麻痺のワクチン一人分に相当します。たった20円で子供一人の命が救われるのです。捨ててしまえばただのゴミが、皆で協力すれば何人もの子供達に笑顔が戻ってくるのです。

地球温暖化が懸念されている昨今、キャップ800個をゴミとして焼却すればCO2が6.3kgも排出されると言われています。

エコキャップ運動を社内でも実施して3年が経過し、今では勢いが減速しつつあります。今一度、明日をも知れぬ子供達への支援と地球温暖化防止のため、皆さんと共に運動を盛り上げて参りましょう。



コラム

「ブレイブ薬」

人間は思い込みの動物と言われている。過去の記憶に頼って隠れた部分を補い、あたかも全体を見ていくかのような錯覚に陥りやすい。



医学の世界ではよく知られている「ブレイブ効果」も思い込みの産物と言ってよい。これは新薬の実験で得られる結果である。2つの試験対象群の一方には本当の薬を投与し、他方へはブドウ糖などの効果が無いものを与える。例えばその新薬が血圧を下げるものであるならば、効果の無いものを投与されたグループにも、実際に血圧低下の所見が得られる現象を「ブレイブ効果」という。

我々が夏は暑いものと考え、当たり前のようにクーラーのスイッチを入れていくが、これも思い込みであるかもしれない。もしかしたら、クーラーの設定温度の28℃よりも外は涼しいのではないかな？ 貴方の単なる思い込みによって、地球が「暑い、暑い」と泣いているかもしれないぞ！

